□議員名：脇本　直美

1　学校に行けない子どもたち、あるいは教室に入れない子どもたちへの支援について

論点	令和２年度から令和７年度までの小中学校における不登校及び教室に入れない児童生徒の推移と、その理由について、どのように分析しているか。
回答	児童生徒１，０００人当たりの出現率は、令和２年度が２１．３人、令和３年度が２７人、令和４年度が２８．４人、令和５年度が３５．７人、令和６年度は３３．８人。教室に入れない児童数は、把握していない。コロナ禍の影響等により人間関係の構築や体験不足に課題や要因があると分析する。

論点	学校に行けない、あるいは教室に入れない子供たちの声を聞き取っているか。また、子供が学校や教室に「戻りたい」と言ったときに、スムーズに戻れる仕組みは構築されているか。
回答	学級担任を中心に声を聞いている。必要に応じて、スクールカウンセラー等やスクールソーシャルワーカーも活用している。確実的な方法ではないが、柔軟に一人一人に対応している。

論点	学校に行けない、あるいは教室に入れない子供たちの家庭のことは理解されづらいが、保護者への支援はどのようになっているか。
回答	保護者との信頼関係を築くことが大切だと考え、保護者が孤立せず、安心して相談できるよう、教育機関だけでなく、こども家庭センター、児童相談所、医療機関と連携し、寄り添った支援に努めている。

2　誰一人取り残されない学びの保障について

論点	学校に行けない、あるいは教室に入れない子供たちへの学びの保障についての取組と、これから拡充すべき具体的な支援はあるか。
回答	学校外では、ふれあい相談室を紹介し、個別の学習支援やタブレットでのリモート授業、社会的自立に向けた活動を実施。必要に応じて、家庭訪問での学習支援を実施。学校内では、ステップアップルーム（厚狭中・高千帆中）での学習指導を実施。文部科学省の掲げ

	るＣＯＣＯＬＯプランに基づき、ステップアップルームの設置を進めている。

論点	ふれあい相談室について、利用者が多く利用できない、時間の配分により希望した時間の利用できないということはないか。
回答	希望が多い場合と日にちが重なる場合は、午前、午後に分けるなどの工夫をして対応している。

論点	学校以外の学びの場として、宇部市では、民間のフリースクールを利用した場合の支援を行っているが、本市では行わないのか。
回答	現在、フリースクール等に通う児童生徒へ授業料等の支援は行っていない。学校制度や教育制度に関わるので、慎重に議論する必要があると考える。

論点	タブレットを活用しリモートで授業を受けた場合、一定の要件を満たせば出席扱いにする考えはあるか。
回答	法改正により出席扱いにできるとあるが、要件があるため、しっかりと吟味し、校長と教育委員会で判断をする。

３　学校に行けない子どもたちが、「引きこもり」にならないための施策について

論点	早期発見・早期支援への取組についてと、義務教育終了後のフォローアップ体制についてどのようになっているか。
回答	不登校になる前の段階での未然防止が最も重要と考え、各学校で力を入れ取り組んでいる。卒業まで、進路決定に向け保護者や子供に情報を提供し、卒業後も中学校に相談するように呼びかけている。

論点	不登校を含むひきこもりの若年性フレイルの現状とリスクについての認識があるか。
回答	ひきこもりを起因とした具体的な発生状況や実態は把握していないが、外出機会の減少により運動不足、生活リズムの乱れ、栄養の偏り、人との関係の希薄化などが長期化し、将来、身体的・精神的・

	社会的な各側面において、健康に深刻な影響を及ぼすものと考える。

4　市の横断的取組について

論点	不登校やひきこもりの子供の年齢により、相談する窓口が変わり、どこに相談するか迷うと聞くが、窓口はどうなっているか。
回答	不登校を含めひきこもりの相談窓口として、健康増進課と委託事業所「ふらっとコミュニティ」を設けている。こども家庭センターにも相談窓口がある。小中学校では、相談窓口一覧表を毎年配布。

論点	相談窓口の一本化について検討したことはあるか。
回答	窓口の一本化について検討したことはない。相談窓口が複数になることによる迷いや相談体制のぶつ切りなどの課題については、内部で話し合っている。

論点	年齢や状況により対応する部署が変わっていくが、情報の共有と、切れ目のない支援の連携はどうなっているか。
回答	子供から高齢者まで、ひきこもりや不登校状態にある方の支援事例を情報共有し、切れ目のない支援体制の構築や福祉、保健、教育、就労など家庭の包括的な支援体制の整備を関係各課の連携・強化を図っている。

論点	学校へ行けない子供やひきこもりへの支援、健康問題や経済的困窮への支援など、子供たちを守るため、誰一人取り残されることのない切れ目のない支援について市長はどのように考えるか。
回答	不登校やひきこもりの問題は、子供たちの将来に関わる重要な課題であり、学校、家庭、地域、福祉、保健医療、就労支援など関係機関が情報を共有し、相談から自立まで途切れることのない伴走型支援に努めている。今後も、相談体制の充実と継続的な支援を一層推進し、誰一人取り残されることのない、切れ目のない支援体制の充実・強化に努める。